

VITALITE インタビュー

マダム・バタフライ

蝶々夫人は誰？ ツル・グラバー夫人説を検証する

暁星国際学園職員 野田 和子

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿代表取締役社長

佐多：『蝶々夫人』は実に感動的ですね。「ある晴れた日に」を聴くたびに胸が揺さぶられます。

野田：そうですね。プッチーニのオペラ『蝶々夫人』には原作があります。その小説が書かれてさ来年で100年になりますが、記念の上演も盛んなようです。と同時に、トマス・グラバーも最近また注目されていて、この7月から新聞小説の連載が始まりました。

グラバーという人は、幕末の1859年上海経由で長崎にやって来たイギリスの冒険商人です。主に薩摩藩や長州藩を相手に日本茶や船舶、武器などの輸出入をし、長崎最大の貿易商になりました。坂本竜馬、高杉晋作、伊藤博文、井上馨とも親交があり、「営利の商人」でありながら、「信念の実現のためには営利の範囲を逸脱せざるを得なかった」という記録があります（※1）。その他、日本で初めての造船技術、スリップ（ソロバン）・ドック建設や日本人用の教会建設などに多大な貢献をしています。

佐多：彼は日本を愛し、73歳で亡くなるまで在留した。このグラバーの妻が、ツルという名の日本女性だったのですね。

野田：ええ。談川ツルは徳川御三家の一橋藩士を身内にもち、大阪から15歳で豊後（大分県）の竹田藩に嫁ぎます。やがて一女をもうけますが、時は幕末の動乱期、竹田藩も佐幕派から勤皇派に変わったために、この子センを婚家に残して離縁しなければならなくなるのです。この時、ツルは17歳でした。家どうしの政治的信条の違いのために乳飲み子を置いて実家に戻るといことは、現在では考えにくいことですが、きっと生木を引き裂かれるようにつらいことだったでしょう。

その後の1866年、ツルは五代友厚という薩摩藩士の世話でグラバーと結婚しています。ツルとグラバーとの間には、ハナと富三郎という二児があります。

この頃には近代的な戸籍ができるのですが（※2）、外国人と結婚した女性への蔑視のためにツルは除外され、子供達も無籍でした。後に、ハナの結婚や富三郎の就職の必要から戸籍がつくられますが、その時“作文”された箇所があったために、後世の混乱のもとになりました。

佐多：そのあたりを、お父上の平之助さんの業績を継がれた野田さんが調査されたのですね。



のだ・かずこ

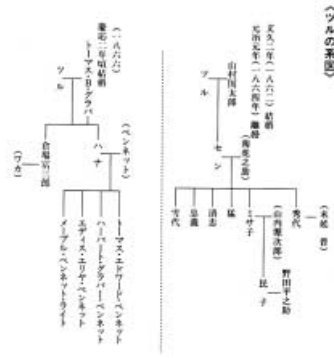
1949年生まれ。長崎市出身。ツル・グラバー夫人の玄孫にあたる。グラバー夫人を研究する父・平之助氏の背を見て育ち、父の著書『グラバー夫人』（新波書房）の再版を機に、その遺志を継ぐことを決意。95年、踏査解明の結果を『長崎談叢』に発表。現在、暁星国際学園理事長秘書。



野田：ええ。父は長崎の諫早の生まれで、大分の女性と結婚しました。昭和10年ころ、姑に「母センの話によれば、祖母ツルは外国人と再婚した。その外国人は『長崎でソロバン・ドックをつくった』という。今は音信不通だが、長崎にお墓があれば探してほしい」と頼まれます。父は国鉄の職務の合間をぬって、人づてにその外国人がトマス・グラバーであること、妻ツルと子をなしたことをつきとめました。ツルのお墓もその父母、弟妹のお墓も長崎・浪の平町の大平寺というところにありました。さらに長男・富三郎の友人であった人にも会うことができ、だんだん、ツルの人となりなども分かってきました。ツルは「グラバー邸で内外のお客をもてなす時はいつも蝶の紋付を着ていた」ので、“お蝶さん”と呼ばれていたことや、お墓と位牌に蝶の紋が刻んであるのを確かめています。

佐多：かつて『蝶々夫人』のモデル論争があったが、決着がつかず、グラバー邸がオペラの舞台によく似ているために“蝶々夫人ゆかりの地”とされた、と聞きました。

野田：原作『蝶々夫人』の作者はジョン・ルーサー・ロンゲ



ツル・グラバー夫人(袖に蝶の紋が見える)

という米国人弁護士ですが、彼は一度も日本に来たことがありません。姉でメソジスト派宣教師の妻であったサラ・コレルが滞日中に見聞した話をもとになっており(※3)、第二版の序文の中で、ヒロインが実在の人物なのか空想の産物なのかという質問に答えて「両方だ」と書いています。その“実在”部分、つまりツルと蝶々夫人との共通点は、先程申しました蝶の紋が残っていることや、「港の見える丘の美しい家」とグラバー邸との酷似のほかに、宣教師との交際(ハナと富三郎とともにメソジスト派のミッションスクールに在籍している)、互いの住居の位置関係もほとんど同じ。さらに、蝶々夫人がピンカートンとその妻に赤ん坊を引き渡すことになって自殺をはかるのが17歳ならば、ツルが歳の娘センを残して離婚したのも17歳です。

佐多:オペラでは「かわいい坊や、お母さんを忘れないで」と絶唱し、短刀自殺しますね。

野田:郷土史家の人たちは、この17歳で自殺した人をモデルと考え、さんざん探しますがどうしても見つかりませんでした。

しかし、原作者のロングはオペラ歌手の三浦環に「私の聞いた実際のお蝶さんは死んでおらず、子供を育てた」と語っています(※4)。

ツルはグラバーと添い遂げ、52歳の時、病のために東京の芝で亡くなりました。その当時グラバーは三菱の顧問を勤めており、『岩崎弥之助伝』には「ツルは聡明温順な貞淑な婦人であった」と記されています。

ですから、『蝶々夫人』にはツルの人生や人間性が大きく関与してはいるが、それはあくまでも原形としてのモデルであって、全てが同じわけではありません。例えば、ピンカートンの存在などは“空想”部分ではないかと思います。

オペラが人気を博したのは、当時流行したオリエンタリズム(東洋趣味)や、子供を置いて自害するヒロインの悲しみと武士の娘としての誇りが、人々の心に訴えたのかも知れません。

佐多:以前、評判だというミュージカル『ミス・サイゴン』を観

ました。これはフランス人が書いた『蝶々夫人』の焼き直しなんですが、最後に米兵夫妻に子供を渡して、ベトナム娘が自殺するんです。明治時代ならいざ知らず、現在これだけ女性の地位が変化したにもかかわらず、ただ言いなりになるなんてあり得ない。むしろ、その男を撃ち殺すぐらいの見せ場があってもいいですよ(笑)。この米兵の無責任さと単細胞に対する作者の揶揄を感じて、私は不快でした。野田さんは女性としてどう思われますか。

野田:もし私だったら、やはりただでは済まさないでしょうね(笑)。現代ならば、母親としての強さをもっと積極的行動で表現することが可能と思います。

蝶々さんが喉をつく短刀は、父の形見で、「荣誉ある生なくば、死の荣誉を得るために」と刻まれてあります。ここで原作者は暗に、武士の血を引く蝶々さんの強い意志と矜持を描いています。

私がこの度の調査研究を通して最も興味をもったのは、原作に宗教や人の生き方への問いかけが含まれている点です。作者が弁護士で、宣教師の妻の姉の話をもとに書いたことを考え合わせても、『蝶々夫人』には単なる娯楽を越えた人間の精神性が込められているように思えます。プッチーニの初演も、この点で原作に忠実であったと知り、そうであればこそ、多くの人に感動を与えているのではないかと思います。

(※1) 杉山伸也著『明治維新とイギリス商人—トマス・グラバーの生涯—』(岩波新書)
(※2) 明治5年の壬申戸籍
(※3) 1933年11月10日付ニュー・ヨークタイムス特派員伝
(※4) 三浦環『私のお蝶夫人』(昭和10年12月付時事新報) 環は2000回以上蝶々夫人を演じ、グラバー邸にその銅像がある。

VITALITE インタビュー

NEW TECHNOLOGY

容態の急変に強い医師を 養成するために 麻酔のバーチャル・リアリティ

高橋 成輔

たかはし・しょうすけ
1943年生まれ。68年九州大学医学部卒業。現在、九州大学医学部麻酔科蘇生科教授。



病気などのために手術が必要になった時、誰もが囚われる不安や恐怖感は、麻酔・蘇生学の進展によって大きく緩和されてきた。ただ痛みを取るだけでなく安全で高度な麻酔を追及して、麻酔科医の心血が注がれてきたが、その基本は、「現代医療の攻撃性や侵襲性から患者の身体を守る」ということである。そのためには、デリケートな全身管理が必要不可欠であり、当然のことだが、危険も伴うのである。

バーチャル・リアリティ（仮想現実）による麻酔のシミュレータ（模擬装置）は、患者の容態の急変やあらゆる不測の事態への対応をトレーニングする、対話式の臨床教育用機器として、いま、その活用が期待されている。

そこで今回は、日本麻酔学会の手術室安全対策委員として、『より安全な麻酔のためのモニター指針』づくりなどに中心的な役割を果たしておられる、九州大学医学部麻酔科蘇生科の高橋成輔教授に、麻酔シミュレータの意義についてお話を伺った。

私たちは一般に、麻酔を“手術が済むまで深く眠っている”状態という程度に考えがちです。

高橋：表面的にはそのように見えるでしょう。が、麻酔という言葉で表現されていることの意味は、手術な

どの強い侵襲から患者さんの身体を防御・保護することなんです。すなわち、鎮痛、鎮静、筋弛緩、それに有害な反射の抑制によって護ります。生体が侵襲にさらされると自律神経の反射が強く過過ぎ、それがわれわれの身体を攻撃して死にいたらしめます。反射まで抑制された麻酔状態というのは、一種の“仮死状態”です。仮死状態をつくることによって始めて患者生体を保護できるのです。

現代医療は、患者生体に干渉、攻撃することによって、そこに生じた悪循環を断ち、より良い結果を得ようという側面をもっています。いってみれば“災い転じて福となす”わけですね。“福”が得られる見通しが立つからこそ、メスで切りつけるようなことが許される。そしてそうするからには、その攻撃から患者さんの身体を護ってあげなくてははいけませんね。

いま麻酔は手術だけでなく、内視鏡による検査にも使われるなど、私たちにとってより身近なものになっています。

高橋：ええ。検査や診断に侵襲が伴うときは、鎮静薬や鎮痛薬などを使用して、麻酔状態に近いものをつくります。それには担当医師が、呼吸、循環、体液、代



九州大学医学部麻酔科蘇生科にて撮影

謝管理という専門医学による全身管理で患者さんの状態を安全に維持し、しかもきちんと蘇生させるという訓練を受けていなければなりません。もし訓練を受けないで麻酔をしたら、悪い結果は目にみえているといっても過言ではないでしょうね。

麻酔状態では、ちょっとしたことで死に直結しかねないのですね。

高橋：麻酔だけでなく、現代医療自体が攻撃性や侵襲性をもつ、リスクなものであるだけに、われわれは“安全かつ高度で、誰もが納得できる医療”の実践を目指しています。そのためには、医師、ナース、技術者たちが基本的な理解をしたうえで、しっかりと臨床教育を受ける必要があります。

かつては動物実験を繰り返してから患者さんに応用するというやり方が一般的でしたが、医療機器が開発改善されて行くなかで、だんだん実験を通り越して、いきなり人で練習するようになっていきます。熟練者が傍らについてはいますが、しかし、私はこれをもう一度考え直したほうがいいのではないかと考えています。

最近ではコンピュータ・テクノロジーの成果によって、この動物実験の代わりをすることが可能になってきました。医療行為に直接かわるのは熟練した医師であって欲しいという、患者さんの願いがありますが、麻酔のシミュレータを使うことによってこの熟練を、かなりの所まで達成できます。

麻酔のシミュレータはインストラクターとの対話によって、臨床トレーニングができるようになっていきますね。

高橋：われわれは通常の麻酔の教科書で、合併症としての悪性高熱症とかアナフィラキシー・ショックなど、さまざまな危険な事態がありうることを知っており、もし対応に手間取ると致死的な結果を生んでしまうことが解っているのですが、その発生が非常にまれなために、ほとんど経験することができませ

ん。そのような患者さんの容態の急激な変化も含め、考え得るあらゆる事故に対して、冷静沈着かつ迅速に処理できるようトレーニングが必要です。

麻酔のシミュレータでは、少し離れたところにインストラクターがいます。まず研修医がマネキンに通常の麻酔をかけます。きちんと麻酔をかけなければバイタル・サインがいろいろ変わるというプログラムに加えて、いつ何が起きるか分からないという状態におかれるわけです。インストラクターも臨床経験が豊富で、このシステムによって危機迫る臨場感を出すことのできる人でなければなりません。インストラクターがモニターの数字をいろいろと変化させるというかたちで、問題を投げかけます。それを見て、例えば、お腹のなかで血液が出ているのではないとか、対策として輸液の量を増やすとか、ある時期からは輸血しなきゃいかんとか、そうするとバイタル・サインが正常になってくる、と。このように、インストラクターとの“駆け引き”のような対話によって、トレーニングの成果をあげようということです。

すると、シミュレーションによるバーチャル・リアリティ（仮想現実）がどこまで現実か、という問題が残りますよね。

高橋：バーチャル・リアリティは限りなく本物に近づけてはいるんだけど、あくまでも本物ではありません。

いまこれだけテクノロジーが進歩して、医師がデータなど物の動きで多くのことを“科学的に”判断するのに慣れている中で、心の問題はどこに行ってしまったのかということが社会的に問われています。手術を受ける患者さんの精神状態と医療効果とか、そういったことは今のところシミュレートできません。それにもうひとつ、われわれの生命体がどれだけ神秘的なものかということにも答えは出ていません。このようなことは大きな問題として提起されています。

例えば、手術室に入ってきた患者さんの近くで何か物を落としたとしますね。すると思わず“アッ”と言ってしまうのですが、これは患者さんをものすごく不安にさせるのです。このような、絶対に言ってはならない言葉、やってはならないことなどは訓練して身につけなくてはなりません。が、マネキンは不安や恐怖感を感じたりしません。この基本的、精神的な態度を失った形で進めようとするれば、シミュレータはいくらでも進められます。

ですから、シミュレータは教材として、今まで本や手真似で教えていたものが、仮想の現実置き換わったという範囲でとらえるものです。最初に触れました、現代医療の攻撃性や侵襲性というものに患者さんがどのように耐えていくかを理解し、いつ何が起きるか分からないという危機感と適度な緊張感をもって患者さんを看まもり、そして常に冷静な対応が即座にできる医師や医療従事者を養成するために、シミュレータを強力な武器にしていけることができると思います。



追悼記念祭・ 誕生日パーティー スイス便り(4)

米川 泰弘

よねかわ・やすひろ

1939年、三重県生まれ。64年、京都大学医学部卒業。京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

「スイス便り」の季節が一巡した。文章を書く作業は毎日スケジュールに追われながら専門の臨床に明け暮れる私に、少し立ち止まり思索する機会を与えてくれた。最終回にあたって、記念祭や誕生日パーティーなどに参加した時に考え感じたことを記したい。

神経内科開講100年祭

本年初頭に、チューリッヒ大学病院神経内科開講100年祭が開催された。開設者はフォン・モナコフ教授である。彼は名前の示す通りロシア人であるが、当時の教授選において医学部教授会の推挙する第一候補はチューリッヒ州の文部大臣のお眼鏡にかなわず、かわって彼が教授として招聘されたのである。

私は学生の時、解剖学で重要な細胞神経の集まりである神経核を学んだ時、初めてモナコフ教授の名に接した。その名はまた、脳神経内科、脳神経外科領域でもよく知られている。例えば、脳血管の前脈絡動脈の閉塞によって起きる症状はモナコフ症候群と命名されている。障害側の反対側の片麻痺、それに多くは知覚低下および視野の障害(同名性半盲)を伴うものである。また、ディアスキーズスといって、脳のある箇所の障害がそこより遠いところにある箇所の機能障害をおこすことを提唱した。この現象は、最近のポジトロンCT(陽子コンピュータ断層撮影)によってもしばしば見られる、脳の循環代謝の異常所見を説明解釈するのに用いられる。が、100年後の今になってもこの現象の意義、成り立ちについて議論されていて、まだまだこれから研究が必要とされている。

当時モナコフ教授のもとには多くの日本人が留学生として訪れていて、故布施堤之助(東北大学教授)、故平沢興(京都大学教授、後に総長)などの大家がこちらで研究に従事された。布施先生のモナコフ教授との共著『脳延髄の解剖アトラス』は、大変卓越したものであることは知られている。また平沢興先生は私が京大に入学した時の総長で、当時その訓示を拝聴し感動したことを昨日のこのように覚えている。こうして、平沢先生の警咳に接した私がモナコフ教授の開講100年記念祭で、「脳神経外科の近未来について」の私見を講演さ

せて頂いたのは何という縁か、とも思った。また、100年とは長いようで短いものであるとも思った。

この会に合わせて、スイス神経内科学会機関紙にモナコフ教授についての特集号が出された。日本でこの方面に造詣の深い東京女子医大の岩田誠教授に一部お送りしたところ、丁寧なお礼の手紙をいただいた。彼は、師弟の系譜をたどると、モナコフ教授のひ孫弟子にあたられるとのことであった。お送りした出版物が、それを評価してもらえる人のもとに落ち着いたことを知って喜んだものである。彼の手紙の中で、ある人の仕事は、100年たって初めて正しい評価がなされるものであるとお言葉があったが、まさにその通りであると思った。

ところで、100年と言えばレントゲン博士がレントゲン線を発見したのも100年前であった。彼は、チューリッヒ大学と隣合わせにあるスイス連邦工科大学(ETHとよばれ、アインシュタイン博士を初め現在まで10数名のノーベル賞受賞者を輩出した名門)に1865年から1870年まで在籍し、後年のレントゲン線発見の基礎を培ったのである。つい最近その顕彰記念の行事もチューリッヒ大学病院放射線科・ETH・大学医学史博物館の三者共同で大々的に催されたところである。街を走る市電の車内や外装にも、レントゲン線発見の意義についての興味深いポスターが貼られて、一般市民の再認識を喚起していた。

クライエンビュール10回忌

モナコフ教授の記念祭から数カ月経って、4月にはチューリッヒ大学脳神経外科の開設者クライエンビュール教授の10回忌の追悼記念祭を私がお世話することになった。

クライエンビュール教授は数年英国で修練された後、この地に私財を投じて脳神経外科を開設され、スイス人の勤勉さで営々と今日のスイス脳神経外科の礎を築かれた。1973年に定年退官される前の3年間、私は一助手として直接その教えを賜った。臨床に当たった患者第一主義、専門医教育の厳しさなど、今思い返してみても、当時かけ出しの脳神経外科医であった私が、故教授から何と多くの大切な基本的な事からを学び取ることができたか、また、その日々がいかに充実したものであったかと、胸の熱くなる思いである。

故教授を偲ぶこの学術講演会の会場には大学の講堂をあてた。ここは、英国のチャーチル首相が第二次世界大戦後のヨーロッパの復興を若者たちに呼びかけたという由緒ある講堂で、歴史的保存建造物になっている。

ゲストとしては、もう引退された初期の弟子たち、現在世界のあちこちで活躍中の弟子たち、特に深い親交のあった英国のサイモン教授（前国際脳神経外科学会会長）、フランスのベルツイエ教授らをお招きした。故教授の後任者であるヤシャルギル教授は脳神経外科の手術用顕微鏡による手術形式を開発、全世界に普及された偉大な存在である。定年退官後アメリカに働き場所を得られた直後で、ちょうどスケジュールが合わずにやむなく欠席されたが、彼の講演原稿“Gentle individualism 穏やかな個人主義”は代読された。その中では、故クライエンビュール教授の、各人の人格を重んじた教育が讃えられ、聴衆に大きな感銘を与えたのである。

追悼祭は土曜日の午前中を利用して、講演にのみ興味ある人々には余り時間的に負担にならぬようにした。故人がチェロの演奏を趣味にされていたので、それを偲ぶ意味でプロのN女史（かつて東京音大で教鞭をとられたというスイス人）のチェロとその友人のピアノの伴奏によるシューベルトのソナタで始めていただき、会の終了はベートーヴェンのソナタで締めくくってもらった。このような会での音楽の生演奏は日本ではあまり一般的ではないが、こちらでは会での講演あるいはそれ以上の意味をもつものである。開会の辞はチューリッヒ大学学長にお願いし、講師の講演内容は出席者の多様さを考慮してできるだけ医師でない人にも理解できるようにお願いした。閉会の辞は医学部長にお願いし、滞りなく会を終えることができた。その後、もう少し旧交を温めたい人々のためには、約1時間半のアペロ（ワイン・ジュースなどの飲み物、ちょっとしたスナックなどをつまんでの談笑会）を同じ建物にある“Lichthof 光の館”で催した。これには、歴代の病棟婦長たち、秘書たち、コメディカルにも参加してもらって和やかな会となった。

この会を催すに当たっては、まず故人の親族クライエンビュール家の了解をえた。夫人も故人となられたが、ご家庭の主だった人々、お孫さんたちにも参加してもらった。たまたまお孫さんの一人が学生実習（医学部5回生）で、私どもの科で2カ月間研修をし、その間スタッフの一員ようになって働いてくれたものである。また、現在スウェーデンからオリバクロナ助手が一年の契約で研修に来ているのであるが、彼の祖父もストックホルム大学の著名な脳神経外科医の一人である。期せずして、ヨーロッパ脳神経外科の二大パイオニアのお孫さんが当科に籍を置いて働いているという状態になっていた。ここでも私どもが先代から教えてもらったものを、今度は私どもが正しい形で次代に引き渡さねばならないという責任を大きく感じるのである。

誕生日パーティーなど

これと前後して、何人かのスイスの知人の誕生日に招待された。いずれも20数年前にこちらで知り合った人々である。以前私どもの家主であったB女史はもう75歳になられた。長くチューリッヒ市内の区役所に勤めておられたが定年になってからは、200年ぐらい前に建てられたワイン造り農家を改造した

家を、いくつかの住まいに分けて賃貸しの管理をしておられる。当時から少し不自由であった目の問題を除いては健康で、毎年一回の海外旅行を楽しんでおられる。チューリッヒ湖畔のレストランに20人前後の親しい人々を招待し、和やかな雰囲気の中で、自分の誕生日を共に祝われたのである。また、還暦を迎えたS女史は、300程のマンションの持主で、一人でその管理をしている。チューリッヒ郊外の田舎町にある自宅で食前酒を振舞い、その後近くの町のレストランで、やはり20人ぐらいの人々を招待してその日を共に祝ってもらったのである。この2つの会ではそれぞれ主催者、つまり誕生日を迎えたその人が、食事の途中にちょっと手短かに感謝のスピーチをするのみで、あとは談笑して和やかなひと時を過ごした。

また、かつて家内の日本語の生徒さんの一人であったT女史は77歳になるが、幼稚園の保育を定年退職してから、趣味の陶器を教えたり、数件の貸家の管理をしたりして、悠々自適の生活をしている。土曜日の夕方に私ども一家三人と、彼女の友達一人がチューリッヒ湖の対岸にある自宅に招かれ、手料理のごちそうをして頂いた。ひざ関節症による痛みもあるはずであるがその痛みを余り表に出さず、人生を楽しんでいる姿には頭が下がる。

時の経過と、支えられ生かされていること

こうして、100年祭、10回忌、色々の人々の誕生日パーティーなど、時の経過を思い起こさせる行事の数々に参加して、人生は長いとも短いとも思う。

日本では誕生日や還暦の祝などは、家族、友人、弟子など周りのものが計画し、本人を祝福するのが一般的であると思うが、こちらでは考え方が全く逆であることに気がついた。人間はたった一人で生まれ、たった一人で死んで行くものであるが、今ここに存在している自分は周囲からの支えでもって生かされている。それを周囲に感謝するという気持ちと、また、日常において親しく信頼をもって交遊している人々に、今年も年を重ねることができたことを共に祝ってもらおうという意味で、誕生日や還暦などという区切りに、当の本人が親しい人を招待するのは理にあっていと思う。

この世に生を受けたことは誠に不思議なことであると、このごろつくづく思う。長く生活を共にしてきた近親を失ったり、多感な青春の貴重な日々を共にした友が逝ったりする度にそれを思う。ある区切りをつけて亡くなった人を偲び、その人に近かった人々が集まり旧交を温めるのが、回忌あるいは追悼祭である。それは、洋の東西で形こそ若干違い、残されたものにとって大いに意味をもつものだと考える。（了）

Akademische
Gedenkfeier
zum 10. Todestag von
Professor Hugo
Krayenbühl



TOPIC

子供のがんと インフォームド・コンセント

子供の死因で一番多いのはやはり不慮の事故だが、病死のなかでの第一位は大人と同じく、がんによるものである。いま大人のがんの治癒（5年生存）率が、早期発見・早期治療によってかなりあがっていることに比較すると、子供の場合は少し事情が違うようだ。血液のがんが半数以上を占める子供のがんは、早期に発見されても、すでに身体のあちこちに転移していることが多いという。

しかし近年、子供のがんも治る場合がどんどん増え、ここ10年は70%以上にまで達した。それは、多施設共同の治療研究の成果である。このような臨床試験は70年代ころから米国で大きな進展を見せたが、同時に試験的治療へのインフォームド・コンセント（説明と同意）を根付かせる力になった。

そこで今回は、子供のがんの治療とインフォームド・コンセントについて、国立小児病院血液腫瘍科の恒松由記子医長にお話を伺った。



国立小児病院血液腫瘍科医長

恒松 由記子

つねまつ ゆきこ

1941年、東京生まれ。65年、慶應大学医学部卒業。済生会宇都宮病院、国立療養所神奈川病院を経て、73年より国立小児病院勤務。現在、同院血液腫瘍科医長。

大人のがんと比較して子供のがんの特徴はどのようなことですか。

恒松：子供のがんには、大人のがんによく見られる固形がん—胃がん、肺がん、乳がん、大腸がんなど—はほとんどありません。子供には白血病や悪性リンパ腫といった血液のがんが最も多く、次いで脳腫瘍、神経芽細胞腫、ウィルムス腫瘍と続きます（P.8図）。発生数は、現在、子供の数が2200万人位として、その一万人に一人の、2200人程度です。15歳未満で発症したがんを小児がんと言っています。

一般にがんは年齢の4乗に比例して発生率が高くなっていきます。これは年をとればとるほど発がん物質にさらされることが増えるからです。大人のがんの80%は、環境的な要因によるものです。それに比して子供は、環境にさらされて年月が経っていませんから、その原因の一部は先天的に親からうけついで遺伝子の異常によるもので、ひきつづき胎児期の細胞に何らかの突然変異が起こったためと考えられ、環境要因はあっても少ないと考えられています。が、本当のところはまだよく分かっていません。

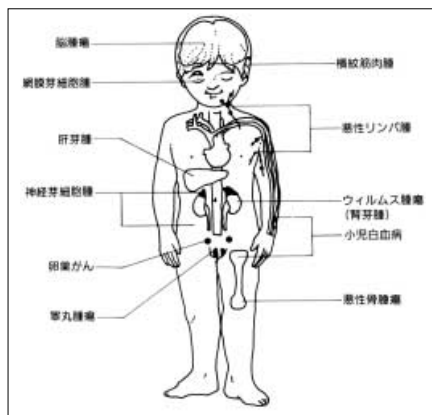


図1 主な小児がん

がんの種類	発症者数	1989年死亡者数(人口動態統計より)
白血病	1,000人(40)	383人
脳腫瘍	475人(19)	234※(良性も含む)
悪性リンパ腫	250人(10)	64
神経芽細胞腫	200人(8)	84※(おもに副腎に)
ウイルス腫瘍	125人(5)	10※(腎臓のがん)
網膜芽細胞腫	125人(5)	6(眼のがん)
軟部肉腫	100人(4)	39※(横紋筋肉腫など)
骨のがん	75人(3)	45(骨肉腫など)
肝がん	50人(2)	24(肝芽腫など)
悪性奇形腫など	50人(2)	17※
その他の新生物	50人(2)	39※
計	2,500人(100)	945(良性腫瘍も含む)

図2 日本の小児がん発生推定数と死亡者数

発生者数は神奈川県と大阪府の地域登録数からの推定値
カッコ内の数字はパーセント
※は推定値

がんの治療といえば、まずは手術を思い浮かべるのですが。

恒松:かつては手術によってがんを取っても、再発転移ということが多く、特に白血病などは治癒率がほとんどゼロでした。けれども、今は放射線の照射だけでなく化学療法が非常に進歩しました。子供のがんにはたいいてい化学療法がよく効きます。ですから、決してあきらめる必要はありません。

がんは全く健康な子供に突然おこることがほとんどです。が、多くの子供たちは一年位、長くても二年間、入院を繰り返しながら治療に専念しますと、普通の子供たちと同じ生活ができるようになります。そしてその後の5年間再発しないであれば、90%は長寿を全うすることができます。残りの10%は、再発、いままでに受けた治療の副作用、あるいは他の障害によって亡くなるということもあります。

化学療法について教えて下さい。

恒松:先程ふれましたように、子供のがんは数が非常に少ないのですが、少ない発症例に対して沢山の臨床試験が、60年代の終わりころから70年代を中心に、米国で始められました。それも一つの施設ではなく、全米的な規模での多施設共同研究が行われ、いろいろな新薬の開発と投与量の強化、副作用対策といった化学療法の組み合わせが、生物統計学に基づいて実践的・経験的に選ばとられ決められてきました。日本でも15年程前から、TCCSG(東京Children's Cancer Study Group)という多施設共同の研究交流をしています。

副作用対策はサポーター・セラピー(支持療法)と

いっています。がん細胞の分裂を抑制するために強い抗がん剤を使いますと、他の正常な細胞分裂まで抑えてしまいますね。特に血液を造る骨髄の細胞分裂が抑制されると、身体を護るべき白血球や血小板の数が減少してしまいます。そのために突然の感染死も起こり得ます。この対策として、白血球の数を増やす薬の投与や血小板を輸血する。また、感染症を予防するための抗生物質など。このようなサポートなしには治療の効果も出ません。また、自家骨髄移植という方法があります。これは一定の治療によって、身体の中にかがん細胞がほとんどなくなったときを見計らって、骨髄の血液を造る幹細胞を取り出し、一たん冷凍保存しておきます。そして大量の化学療法をして、焦土と化した骨髄の畑を救う意味でそこに幹細胞を戻してやるというやり方です。この方法によって、今まで治る見込みのなかった再発のがん等も治るようになってきました。

大変な治療という印象です。

恒松:そうですね。このような介入的治療と、それに伴う吐き気や毛髪が抜ける等の副作用に耐えていくことは、成人、小児を問わず、大変つらいことです。ですから医師だけでなく、ナース、コメディカル、家族等、周囲の人たちの援助が非常に大切です。子供たちには騎馬戦の騎手になって病気と闘って行くんだと話しています。騎手に目隠しをしていたら、がんという敵と闘えないでしょう、と。つまりがんと闘うのは自分だけではなくて、周囲の人たちと共に立ち向かっていくのだという意識をもたせるようにしています。



「手術後40日間人工呼吸器をつけていた。でも、もうすぐとれるんだ」

子供たちは自分ががんであるということを、どのように受け止めて行くのでしょうか。

恒松:「告知」という言葉は情報の流れが一方的なので、私たちはあまり使いません。コミュニケーションを通じて、医師と患者との間に信頼関係を築くことがまず大切です。

子供たちはほとんどが他の病院からの紹介で来る訳ですから、もうここに来るといっただけで、ただ事ではないと思っています。うすうすは察して、やっぱりそうかという風に。でもまだ子供ですから、自分の人生とがんという病気とのつきあいというところまでは行かないのですね。大人ですと、人生設計が突然中断されると考えたり、いろいろな社会のしがらみの中で生きているという意識が大きいので、違いがあるのかも知れません。一番反応するのは、治療のスケジュールを説明して、しばらく学校に行けないということが分かったときで、ワッと泣き出す子供が多いですね。

小学3年生以上を対象にしたアンケートでは、「子供でも病気のことはキチンと教えるべきだ」に賛成が73%です。「何歳位だったら理解できるか」に対しては「10歳ぐらいだったら全部理解できる」と答えています。

70%以上が治るんだ、ということが大きいのではないかな。

恒松:そうです。T君という15歳の少年の書いていることを少し紹介しましょう。「恐ろしい病気だということは知っていたから、正直いってショックだった。治るかどうかもわからなかったので気落ちしたけれども、(先生が)これからの治療のことや治る病気だということを熱心に話してくれたので、気分が少し晴れた。家に戻っておじいちゃん、おばあちゃんに病名のことを話したらなぜか涙がでしまった。朝起きるとガンのことが頭を巡った。つい三日前まではとても元気だったのに。(略)でも、仮に一年入院しても80歳位まで生きれば十分じゃないかと思うことにした。(略)家がとてもいごごちがいいとつくづく思ってしまった。夜はねるのもったいないので遅くまでおきていた。ねる前、

- ①先生を信頼すること、先生を信じて治療をすることが大切だ
- ②自分のためにみんな応援している。その人たちのためにも元気なすがたを見せたい
- ③病は気からというように、精神力でもやっつけると思い、ねた。」



「昨日の検査では、白血球300、血小板が25,000だった(T君)」

すべてを語っていると思わせるような内容ですね。

驚くほど純粋で前向きです。

恒松: 従来、子供のがんのインフォームド・コンセントは親が代行して来ましたが、しかし患者主体は子供ですから、ある程度解る年齢であれば、それぞれの理解度に応じて、私たちは積極的に話しています。子供でも、子供だからこそ、納得できない治療や検査を我慢してやるのでは病気に闘えません。闘病後の長い人生のQOL(生活の質)に係わってくる問題でもあります。例えば結婚して子供ができたというような情報、初めの病気に関連しているかも知れない変調、晩期障害の最新情報など、生きる主体は子供であって、親といえどもその方針の決定を代行できない年齢が遅かれ早かれ来る、と思うからです。

なかには亡くなっていく患者さんもいるわけですが、3歳位の子供でも、今度生まれてくる時はもっと丈夫な子になって……とか、お父さんお母さん僕の為に本当にありがとう……とか、子供なりに成熟したハーベストを迎えて死んでいきます。それには病初期から、治療にはリスクが伴うこと、感染死もありうることも含めて、いつかは誰にも死がやって来ることを話しておかなければなりません。

子供に家族が付き添うということについてはどうでしょうか。

恒松: 日本は入院費がそんなに高くないし、保険や公費助成によるカバーもありますので、小児がんは医療費がほとんどかかりません。ですから白血球の少ない時はなるべく病院にいて万全の対策をとって欲しいということが基本になります。お母さんのほうも、他にお子さんがいらっしゃるとか核家族なので付き添えないということが多し。それに病院のシステムも付き添わない方針で作られ

ています。

ただ子供にとって入院ということで、一番悲しいことは親と離れることです。それはものすごく大きな痛みだと思います。できれば24時間いつでも付き添いができるようにした方がよいと思います。でも、いままでそれをして来なかったからと言って、ホスピタリズムなどの問題が起こっているわけではありません。親といなくても、看護婦さんが子供たちの面倒を見、子供たちはかえって私たちのことを信じてくれるというようなことはあると思います。

インフォームド・コンセント同意書用紙

この同意書はあなた(またはあなたのお子さま)が別紙のようなプログラムで治療を受けること、検査の目的で血液などのサンプルをとられること、治療が終わってからものちにおこってくるできごとを調査されることにご協力をおねがいするものです。よく読んで、ご確認ください。そして同意いただけましたら最後に署名、捺印してください。

同意書

私は以下の声明文をよみここに、この病院で治療研究に参加することにいたします。私はこどもにも納得させ許可をえました。

- 1) 私はこの治療研究で予知できないようなリスクもあることを承知しています。
- 2) 私はこの治療研究をいつでもやめられることを、そして代替えの治療にうつることができることも解りました。
- 3) この研究の中でわたしの個人情報秘密保持されることを知っています。公の審議機関への提出命令などの特別な場合をのぞき提出されることはないということを知りました。
- 4) もし、この治療研究で疑問があったばあい _____ 医師にいつでもたずねることができます。
- 5) 私はこの同意書のコピーを一通いただきます。

	年	月	日
患者(署名)			印
保護者(署名)			印

私は〇〇〇〇研究グループの治療研究プロトコル〇〇〇〇について患者ならびに保護者に説明し、患者の本研究への参加の同意が得られたことを認めます。

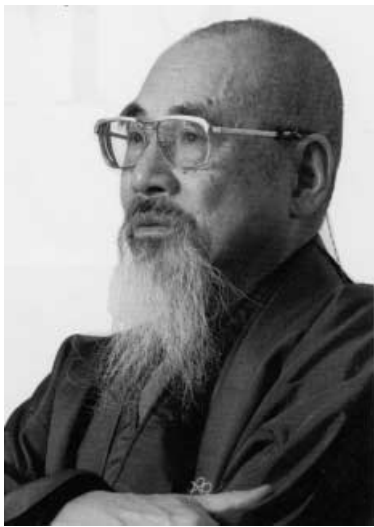
		病院	
	年	月	日
主治医	署名		印

FAITH

キリスト教と仏教の共通の根拠(2)

一禅者からキリスト教徒への提言

スイス・ツークで開催された第1回キリスト教・仏教
対話集会における講演(1994年7月)より抜粋



秋月 龍珉

あきつき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧。

著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

Vol.14承前 (二)

さて、私は青年時代に洗礼を受けてプロテスタントになり、今日禅匠(ゼン・マイステル)として世に立つにいたるまで、多年にわたり自身のうちで、またキリスト教神学の友人たちと、「キリスト教と仏教の思想的対話」を真剣に続けてきました。その結果、一見相異なる両教に、何か宗教的な「共通の根拠」のあることが最近見えるようになりました。私はそれを皆さんに語って、批判を得たい。そのためにはるばる日本からスイスまで訪ねて来しました。

確かにキリスト教と仏教は違います。キリスト教は「始め

に神が天地を造った」という。そしてその神の支配が天になるように地にもならんことを期する宗教です。それに対して仏教は、開祖釈尊その人が無神・無靈魂の立場に立っています。仏陀は人生苦の解決に神をもちださず、救われるべき靈魂の実体を否定して、無我を説きました。彼は神の支配を説かず、業による因果の道理を説きました。縁起縁生の説です。

このように相異なる両教ですが、「共通の根拠」があることをこれから申し上げます。私は宗教者としてキリスト教から深く学びました。第一に「真の神を知らない者は、必ず偶像をもつ」(ガラテヤ書4:8、イザヤ書44:17~23、出エジプト記20:3~6)、第二は「真の神を見た者は死ぬ」(イザヤ書6:5、出エジプト記33:20)です。私はこの二つのテーゼを私の禅仏教に当てはめてみました。その結果、次のようなことが明らかになりました。

「真の神を知らない者は必ず偶像をもつ」—禅仏教は偶像をもってはいないか。こう考えた時、私の心耳に禅匠黄檗(?~856?臨済義玄の師)の次の語が響きました。「諸仏と一切衆生と、唯だ是れ一心にして、更に別法なし」(伝心法要一)。「もし仏を觀じて清浄・光明・解脱の相を作し、衆生を觀じて垢濁・暗昧・生死の相を作さば此の解を作す者は、河沙劫を歴るも、終に菩薩を得ず。相に著するが為の故なり。唯だ此の一心のみ、更に微塵許りの法も得べきものなし。即心是れ仏なり。如今、学道の人、此の心体を悟らず、便ち心上に於いて心を生じ、外に向かつて仏を求め、相に著して修行す。皆な是れ悪法にして、菩薩の道にあらず」(伝心法要一)。「仏陀たちとすべての衆生たちとは、ただ[一心]だけであって、そのほかのものは全くない」。「もし仏について清らかな輝いた、解脱の相を思い描き、衆生について汚れ、愚昧な生死流転の迷いの相を見て取るならば、そんな理解をする人は、未来永劫ガングス河の沙の数ほどの時を重ねても、結局菩提を得ることはできない。それは[相]に執われているからである。大事なものは、ただこの[一心]だけであり、そこには塵ひとつほども把み得る法はない。この心そのものが仏である。それなのに今日、修行者はこのような心の本体

を悟らず、その肝心の一仏心の上にもう一つ本心という相を生じて、それを目ざして外に向かって仏を求め、相に執われた修行をしている。みな邪悪なやり方であり、菩提の道ではない」。

ふつうには一方に迷っている衆生がいて、他方に悟った仏がいる。この迷った衆生が修行して悟って仏（覚者）になるとするのが仏教であると考ええる。しかし禅者はいう「そんな仏もない、衆生もない。あるのはただ〔一心〕だけだ。そのように仏を、悟り・清浄・光明・解脱と見、衆生を汚穢・暗昧・生死と見るのは〔相〕に執われるからである。そんな見方で修行するのは邪悪なやり方で、そうした修行では永劫菩提は得られない。大事なものは〔一心〕だけである。その外の法など微塵ばかりも得られるものはない。ほかならぬこの心こそが仏である。それを見ないで別に外に理念を立てて、相に執われた修行をするな。そんなのは菩提の道ではないぞ。仏だとか衆生だとか考えているのは、凡夫の描いた〔相〕にすぎない、そんなものは実際にはどこにもありはしない。あるのはただ〔一心〕だけだ」。だから禅仏教は、ただこの一心だけを直指人心するのである。

ここまでくれば、正統派キリスト教の信条「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同（クレド）の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体（ヒル）のよみがえり、永遠の生命を信ず」のほとんどの神観・人間観が真の神とは異なる「相」、すなわち偶像ないし“神話”であると批判されるべきではないか。

（三）

しかし、異なった思想伝達の背景を有する仏教の「仏」と「衆生」の語をそのままキリスト教の「神」と「人」に対応させるのは、いささか乱暴であろう。そこで私はこの個人存在、インド人のいうアートマン、近代西洋人という自我を宗教哲学の術語として、個（The Individual）とし、神や仏を超個（The Trans-Individual）と称することにする。そうすると、先の黄檗の語は「単なる超個もない、単なる個もない、あるのは一息に超個の個だけだ」ということになる。そこで、この「一心」すなわち「一息に超個の個」なる実存の原事実を聖書の中に探ると、「インマヌエル」（神、我

らと共に在います）ということになろう。インマヌエル、これが黄檗の「一心」、私の「一息に超個の個」という人間実存の原事実である。

ここから見ると、神というも人というも、「相」にすぎない。このインマヌエルの原事実に触れてこそ、人は真の神に逢う。そのときにのみあらゆる偶像が姿を消す。

哲学者滝沢克己は、このインマヌエルという「神と人の接触」に、第一義の接触と第二義の接触を区別し、その間に「不可分・不可同・不可逆」の区別と統一があると主張した。神と人との第一義の接触とは、あらゆる人の自己成立の根底に無条件に直属する、インマヌエルの原事実のことである。しかし我々人間は通常この事実を目覚めていない。人間がこの原事実を目覚める出来事が、神と人の第二義の接触である。ここに宗教的生が成立する。滝沢によると、仏教もキリスト教も、ともに第一義の接触に基づく第二義の接触の異なる形であり、ここに両者が対話に入り得る「共通の根拠」があるという。

それなのにこれまでキリスト教は、この二つの接触の区別をイエスにおいて明晰に追考しなかった。イエスは第二義の接触を典型的に成就した一人の人間なのに、伝統的キリスト教は、イエスによって第一義の接触そのものが成り立つかのように誤解した。いやむしろイエス自身が第一義の接触そのものとした。こうしてイエスは「唯一の啓示＝救済者」となり、ここにキリスト教の絶対性が成り立つ。しかしその立場に立つ限り、他宗教との対話は道を断たれることになってしまう（道者いわく、それだけに第二バチカン公会議の決定以後の諸宗教間の対話路線は貴い）。他方仏教はこのような自己絶対化には陥らなかったが、しかし第二義の接触にすぎない人間的な「覚」を一切の判断の基準にすることによって、それを第一義の接触の上に置く誤りを犯してゐる（道者いわく、禅者はともすれば本末の無我であるべき仏法を、大我禅に墮してしまふ）。

滝沢は、私への私信では接触という言葉を使わずに「一」と言った。鈴木大拙のいう「東洋的一」の「一」である。また第一義の接触と第二義の接触の話を、仏教でいう「本覚と始覚」に相当すると見てよいかと、西村恵信が問うたとき、滝沢ははっきりそれを肯定したという（第一回東西宗教交流学会）。さらに滝沢は、「神と人との第一義の一」と「第二義の一」について、重要な内容規定を与えた。それは「第一義の一」と「第二義の一」の関係は、不可分・不可同・不可逆であり、また第一義の一における神と人の関係も、同様に不可分・不可同・不可逆であるというのである。

（続く）

LOVE

「愛こそ世の光 さかえあれ!」

—オペラ“TURANDOT”北京初公演へのお誘い—

「トゥーランドット」北京初公演を祝って



東京芸術大学オペラ科教授
指揮者

大町 陽一郎

今年はアジアに平和がもたらされて50年目の年に当たります。この意義ある年にイタリアの有名なオペラ作曲家・プッチーニが北京を舞台にして作曲した歌劇「トゥーランドット」を北京歌劇院の協力を得て当地で上演できることは、誠に喜ばしいことであります。

広大な中国にはいろんな民族があり、いろんな音楽があるということを、このオペラは示しています。そして、トゥーランドット姫がオペラの最後で、タートルの王子カラフの愛を得て、「愛こそ世の光 さかえあれ!」と民衆が二人の幸せを讃えるシーン、愛の謳歌、アジアの平和を希う印象的な場面といえましょう。

祝 辞

(株) 東機貿代表取締役社長
佐多 保彦

「“TURANDOT”を北京で指揮することが僕の夢なんですよ…」

世界的なオペラ指揮者・大町陽一郎氏がふともらされたこの言葉に、私が強く心を動かされたのは昨年のことでした。私は大町先生のファンであると同時にプッチーニの大ファンですので、“TURANDOT”が北京で上演できれば何とロマンチックで感動的なことであろうと考えました。これはプッチーニ自身が最も望んでいたことでしょう。彼の死後70年を経て、それが実現するのです。

大町先生と共に中国人スタッフによる、北京初公演の歴史的瞬間に立ち会える感激を皆様と共に分かち合いたいと思います。

ブルゴーニュにて『別冊少女フレンド』読者レポーターたち



書在「TURANDOT」北京首演文前

中国中央歌劇院院長
作曲家
王 世 光

この度中央歌劇院は、プッチーニのオペラ「トゥーランドット」をイタリア語で上演いたします。

中央歌劇院は開設43年、これまで40篇あまりの内外のオペラを上演してきましたが、この公演によって中日芸術家交流に新たなページを加えることができるでしょう。

プッチーニはアジアを愛し、日本と中国の音楽を学んで、「マダム・バタフライ」と「トゥーランドット」を書きました。中で最も素晴らしい音楽は、愛に献身した女主人公にささげられています。

日本の皆様が北京に来られ、このオペラをご覧になりますことをお待ちしております。

クイズに答えてオペラに行こう! (’95年11月16日～21日)

往復航空券・3泊宿泊券・オペラ鑑賞券プレゼント!!

日中の芸術家によるイタリア最大のオペラ「トゥーランドット」北京公演。この公演に東機貿創業40周年を記念して、“VITALITE”読者5名をご招待します。オペラのヒロイン、美しくも冷酷なトゥーランドット姫は、並みいる求婚者に3つのクイズを出し、答えられない男を次々と死刑に処します。これに因んで以下のクイズにお答え下さい。

- ①『トゥーランドット』の作者プッチーニが書いた、日本の長崎を舞台にしたオペラの題名は?
- ②姫の居城・紫禁城の門前にある、100万人を収容できるという広場の名前は?
- ③販売台数6000台に迫る東機貿のベンチレータ(人工呼吸器)の名前は? クイズの正解者の中から抽選で5名の皆様に、北京旅行とオペラ鑑賞券が当たります。

ご希望のかたは、官製はがきに上記クイズの答と応募の動機、住所、電話、番号、氏名、年齢、職業を明記のうえ、ページ左端の40周年マークを貼って、〒140 東京都品川区勝島1-5-21東神ビル2F(株)東機貿コミュニケーション部オペラ懸賞係までご応募下さい。お問い合わせはTEL5762-3004まで。締め切りは9月末日。発表は10月初旬。当選者に直接ご連絡します。尚、同ツアーも企画しています。

講談社・『別冊少女フレンド』が

シャトー・ド・シャイイ(フランス ブルゴーニュ)に読者8名を派遣

講談社(東京・文京区)の中高校生向け漫画雑誌『別冊少女フレンド』は、創刊30周年記念企画として、フランス特派員を募集した。応募総数2800通。同誌の人気作家・前田あやえさんが描く漫画の主人公のような自分自身の体験談を書いた。

幸運を射止めた8名は、前田さん、料理研究家の脇雅世さんと共に、夏休みの10日間、パリとブルゴーニュに取材旅行した。ブルゴーニュでは、シャトー・ド・シャイイに滞在して、観光やピクニック、料理教室の他、当地の同世代たちとの交流会も。「取材レポート」は11月ごろ発表の予定。

出発日の7月29日、女子高校生たちは「フランスの田舎って、日本とちがうのかな?」「美術館が楽しみ」「ショッピングがしたい」とウキウキ。送る親御さんたちは「かわいい子には旅」「若いうちこそ異文化体験を」とニコニコ顔だった。

HOPE

ブルゴーニュ小史(5)

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。フランス文学者。文芸評論家。

著書に、『石と光の思想』(勁草書房)、『小林秀雄とその時代』(文芸春秋)、『恩寵の音楽』(音楽の友社)、『西欧と愛』(小林書房)、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』(新潮社)、『ヨーロッパの四季』(東京書籍)、『ヨーロッパ古寺巡礼』(新潮社)など多数。



デジヨンの「解放広場(プラス・ドラ・リベーション)」は半円であり、ヴェルサイユ宮をつくった建築家、マンサールの設計によるものであり、古代的で端正なおもむきがある。その前、道をはさんで左にブルゴーニュ公の館があり、つながった形の右側が美術館である。このなかにはイタリア初期からフランドル、ネーデルラント関係の絵画、彫刻、陶器等の作品が華やかに陳列されているが、それらの多くはかつて、14世紀から15世紀後半にかけて、いわゆるホインガーの言う『中世の秋』を彩るものである。

15世紀の1477年、ブルゴーニュ公、シャルル豪胆公(ル・テール)の死まで、すなわちブルゴーニュ公国がもっとも栄えた時の版図は、ブルゴーニュ地方、フランシュ・コンテと北仏のピカルディ、アルトワ、今のベルギーであるフランドル、そしてリュクサンブルク、ユトレヒトを中心とするネーデルラント等を含むものであった。したがってこれらの領土はまさしく一つの国に値する大きさや勢力を持っていたと言ってもよい。

それでは何故ここまでブルゴーニュ公国が栄えたのか、という理由が問われなければならないだろう。すでに前回でふれたように、この公国はゲルマン系のブルグント王国の解体に発し、またシャルルマーニュ大帝死後のヴェルダン条約によって三分割された後、ソヌ河の東西を占めたのであるが、シャルル禿頭王の死後、弟のリシャールが治め、カペ王朝に継がれた。ブルゴーニュ公国の成立には、こうした政治的理由のほかに、前回で言及したクリュニー会とシトー会というヨーロッパのキリスト教再生の原動力というべき宗教的拠点が意味をもっていたことを知るべきであろう。

やがて、カペ王朝のブルゴーニュ公であったフィリップ・ド・ルヴェルが死に、国王ジャンがこれを引きつぐものの、ジャンが亡くなった後、弟のフィリップがブルゴーニュを領有することとなる。したがって1363年、ブルグニュー公家が広い意味でフランスのヴァロワ王朝のものではあるが、狭い意味では一種の自立した国の形をとるに至るのである。そこから、このフィリップ大胆公(ル・アルディ/1404年没)、ジャン無畏公(サン・プール/1419年没)、フィリップ善良公(ル・ボン/1467年没)、シャルル豪胆公(ル・テール/1477年没)といずれも特徴のある諸公がこの公国の名をたかからしめた。しかし、最後の豪胆王はスイスとの戦いに敗れて亡くなり、男の子に恵まれず、また一人娘のマリーがハプスブルグ家のマクシミリアンと結婚したこともあり、フランドルはハプスブルグ家に、ブルゴーニュ公領はフランスのルイ十一世の手にわたり、遂に歴史から姿を消すに至るのである。

しかし、このブルゴーニュ公国は、フランスとドイツの間にあり、人口6~700万を有し、葡萄酒、小麦、塩、牧畜、銀行、石炭等の資源や産物に加え、かつてのフランドル、ネーデルラントの海上貿易都市をもち、さらにライン河やロワール河の河川貿易によって富をあつめた。そうしたものがデジヨン、ブリュージュ、ブリュッセルの都市

を首都として多極的にこの公国を潤したと言ってもよい。

その上、ブルゴーニュ公は、P・ガクソットによれば、「十二貴族(ペール・ド・フランス)の筆頭であり、この資格で、高等法院の管轄に属しており、また国王の近親者であり、王国の摂政の一人である。にもかかわらず、彼は実際は外国の君主である。高価な装飾によって、華々しい儀式によって、贅沢な饗宴と衣服と宝石と食器類によって、デジヨンの宮廷は狂気の国王(フランスのシャルル六世のこと)の貧しい宮廷を圧倒している」(『フランス人の歴史』林田・下野訳)ことはたしかであった。

もとより内紛がなかったわけではない。フィリップ大胆公(ル・アルディ)の死後、長男のジャン無畏公は父の政策をついだものの、王の弟ルイ・ドルレアンに押さえられる。これを怒った彼はルイを暗殺するが、ドルレアンの遺子に娘をとつがせていたアルマニャック公がジャンに対抗し、フランスは二分される。そこにつけこんだイギリス王、ヘンリー五世がフランスに軍を送ってアルマニャック派を倒す。その間にブルゴーニュ派はイギリスと和平交渉をするが、ジャンは惨殺される。しかしやがてシャルル七世もイギリスに勝ち、またブルゴーニュ派もアルマニャック派と和平し、「アラスの平和」がもたらされるという争いがあつた。

さて、フィリップ善良公の時代、デジヨンはヨーロッパの中心となり、フランドル画の傑作もここで生まれた。音楽で言えば「礼拝堂楽団」をもち、宮廷の世俗音楽を洗練させ、15人から16人をもって構成される団員はネーデルランド人が多く、また「ミストレル楽団」にはヨーロッパ中から楽士が集まったのである。さらにこの宮廷の食事作法は各国につたえられたが、中でもハプスブルグ家とのマリーの結婚がウイーンの宮廷に、このブルゴーニュ公国の文化の料を伝え、それが長く一つの範となったことは刮目すべき事実であろう。(了)

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか?数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

お問い合わせは ㈱佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ

TEL:03-5762-3010 担当:岩沢、田中

